藍野学院紀要，第 17 巻，2003，pp. 19 – 36

〔**Article**〕

Lushun (Port Arthur)

— History of naval port and schools —

Yoshio Masuda

Aino Gakuin College
Professor Emeritus of Osaka City University

〔論　説〕

旅　順

――軍港と学校の歴史――

増　田　芳　雄*

はじめに

今の日本で“旅順”の名を知る人は，おそらく司馬遼太郎の「坂の上の雲」における日露戦争の二百三高地の戦いからであろう。乃木希典大将率いる第三軍は苦戦の末，ステッセル将軍に率いられたロシア軍の立て籠もる要塞旅順を陥落させた。もともと，1894－95年の日清戦争勝利の結果，清国の宗主権の放棄（事実上の日本の支配権の承認）により，旅順のある遼東半島，朝鮮半島，そして台湾島を割譲するという条件で日本は講和条約に調印した。遼東半島については，この方面への日本の進出をもっとも嫌ったロシアが主導して，フランス，ドイツとともに遼東半島の領有権の放棄を勧告した。この三国干渉によって日本はやむを得ず領有権を放棄した。その結果，東洋における権益を確保したいロシアと結んだドイツとフランスの“三国干渉”によってこの割譲は実現しなかった。こうして，植民地政策によって東洋へ進出しつつあった欧米列強は日本の進出を妨害した。

案の定，ロシアは1898年，清国から旅順，大連の租借権，南満州鉄道の敷設権をもぎ取り，その南下政策によって中国東北部（満州）に進出し，朝鮮を脅かすに至った。ロシアは旅順を堅固な要塞とし，満州における軍事力を増強，満州のみならず朝鮮半島を窺う勢いで東洋におけるその地歩を固めた。ロシアの進出は日本を脅かし，ここに日露戦争が勃発した。幸い，中国における権益を守るため，ロシアの進出を喜ばなかったイギリスは日本と同盟を結び，日本の対ロシア戦争を援助した。その結果，日本はアメリカの仲介で辛うじて勝利を収め，サハリン（樺太）の南半分の領土を得たほか，旅順，大連を含む関東州の租借権と南満州鉄道を得た。

こうして，第二次世界大戦に日本が敗れる1945年まで，この3地域，すなわち朝鮮半島，台湾島，関東州および樺太南半分は日本の領土として地図の上でも赤色で示されていた。旅順は中国から最初ロシアが，次いで日本が租借し，第二次世界大戦後再び中国へ返される，という歴史的宿命をもった軍港である。日本時代，ここには関東庁，海軍要塞司令部（大東亜戦争とともに“海軍警備府”と名称が変わった）など政府・軍の機関のほか，各種の日本の学校があった。大戦前，日本外地に官立の学校が多くあり，京城帝国大学や台北帝国大学，台北高等学校など，主な学校はその地の首都にあった。これに対しわずか人口2万の小都市軍港であった旅順に工科大学，高等学校，師範学校，医学専門学校などが置かれたのは珍しい。本稿ではこの歴史的に興味ある旅順の歴史的変遷について，とくに旅順工科大学と旧制最後の高等学校であった旅順高等学校について考察したい。

1．旅順のあらまし

中国語読みをアルファベットで書くと“Lushun”であるが，英語では“Port Arthur”という。中国に返還後，隣接する大連市と総称して“旅大市”と呼ばれたが，現在は再び別々に“旅順”および“大連”となったようである。以下の叙述は平凡社「世界大百科事典」，「昔日の満州」，「さらば大連・旅順」などを参考にした。

* 藍野学院短期大学客員教授，大阪市立大学名誉教授（理学部）

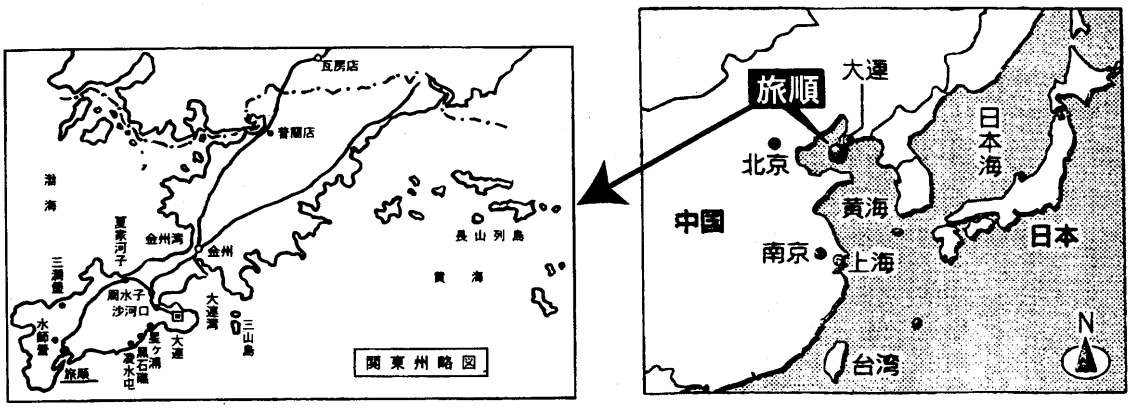

図1　旅順全図（「向陽」2000，佐藤益躬，1997から）

・地　理

遼東半島の南西端，大連の西に位置している。図1，2に示すように，東の黄金山と西の老虎尾半島の間に市街があり，黄金山と老虎尾半島の間に幅300メートル足らずの水道が外洋につながっている。湾の北側に市があるが，湾は東港と西港に分かれている。前者は狭いが，水深が10mあり，古くから軍港として使われた。西港は水深が浅く，改修して商船が辛うじて入れるようになった。旧市街は東港の北側，新市街は西港の北側にある。その間に標高124mの白玉山が位置し，その麓に遼東半島の北側を大連から通ずる鉄道の終点，旅順駅がある。旧市街の北には乃木大将とステッセル将軍の会見所として知られる水師営や多数の戦死者を出した，激戦地・二百三高地がある。また，黄金山の北には東鶏冠山，椅子山などロシアの堡塁が築かれた山々が連なっている。

東港の北にある旧市街には日本租借時代に海軍要塞司令部，商業地や多くの古い住宅があった。また，西港の北には関東庁，大谷探検隊が西域で発掘して持ち帰った6体のミイラで有名な博物館，新住宅地，それに多くの日本官立の学校があった。また，清朝の姻戚で，川島浪速の養女になった川島芳子，すなわち“東洋のマタハリ”の生家・粛親王[1]邸が丘の上にあった。さらに高台には大正公園，関東神宮，ゴルフ場があった。この新市街はアカシア並木に囲まれた美しい町並みを示している。

新市街の学校には，古い歴史を持つ旅順工科大学，旧制高等学校としては最も新しく，昭和15年創設の旅順高等学校，それに旅順師範学校男子部と女子部，そして旅順中学校，旅順高等女学校，それに師範付属小学校があった。これらについてはあとで述べたい。

・歴　史

この土地は古来“獅子口”と呼ばれ，唐代には日本の使節も唐との往復の途中立ち寄ったが，明代の頃には多くの南方移民が渡来し，船舶の寄航が頻繁となり，

1）粛親王（1866－1922）は清朝の皇族である。ヌルハチの子，太宗ホンタイジ（後述）の七男・福臨（1638－1661）は清の順治帝で，以後，最後の皇帝・溥儀まで清朝は続いた。太宗の長男豪格（ホーゲ，1609－1648）は清朝樹立に多大の貢献をしたため粛親王に封じられた。この清朝の名家の子孫，第10代粛親王になった愛新覚羅善耆（1866－1922）は青年時代から明治維新の影響を強く受け，国の将来を憂いた。1900年の義和団の事件のころ，ロシア勢力が粛親王の所有していた旅順近辺の土地を略取し，その一家は貧困に喘いだ。このため，経済的援助を求めて日本人に接近した。1907年，袁世凱の後援により民生部尚書となり，ついで民生大臣となった。1911年，辛亥革命が発生したとき，宣統帝の退位は不可，という強硬論を主張したが敗れ，清朝滅亡の後，旅順に隠遁し，同地で没した。彼には正妃のほか第4側妃まであり，男21人，女17人という多くの子を持った。第4側妃の娘〈第14番目〉顕玗は東洋のマタハリ（Mata Hari, 1876－1917）と呼ばれ，日中間で数奇な運命たどった川島芳子（川島浪速の養女となる）である。彼女はスパイとして日本に協力したため，戦後逮捕され，北京で死刑に処せられた（金連纘，1993）。

なお，マタ・ハリは本名ツェレ（Gertrud Margarete Zelle）といい，無類の妖艶な女スパイとして知られる。国籍は不明であるが，オランダ系といわれ，1895年，オランダ将校と結婚し，2児をもうけたが，1901年離婚，パリに現れ，上流社会に出入りした。第一次世界大戦のとき，ドイツのスパイとなって働いたが，1917年，フランス当局に探知された。一旦スペインに逃亡し，再びドイツ諜報部の指令でフランスへ舞い戻ったところを逮捕された。これはドイツ側に裏切られたためと言われる。同年7月死刑の判決を受け，10月15日に銃殺された（Grillandi, 1982；秋元典子訳，1986）。

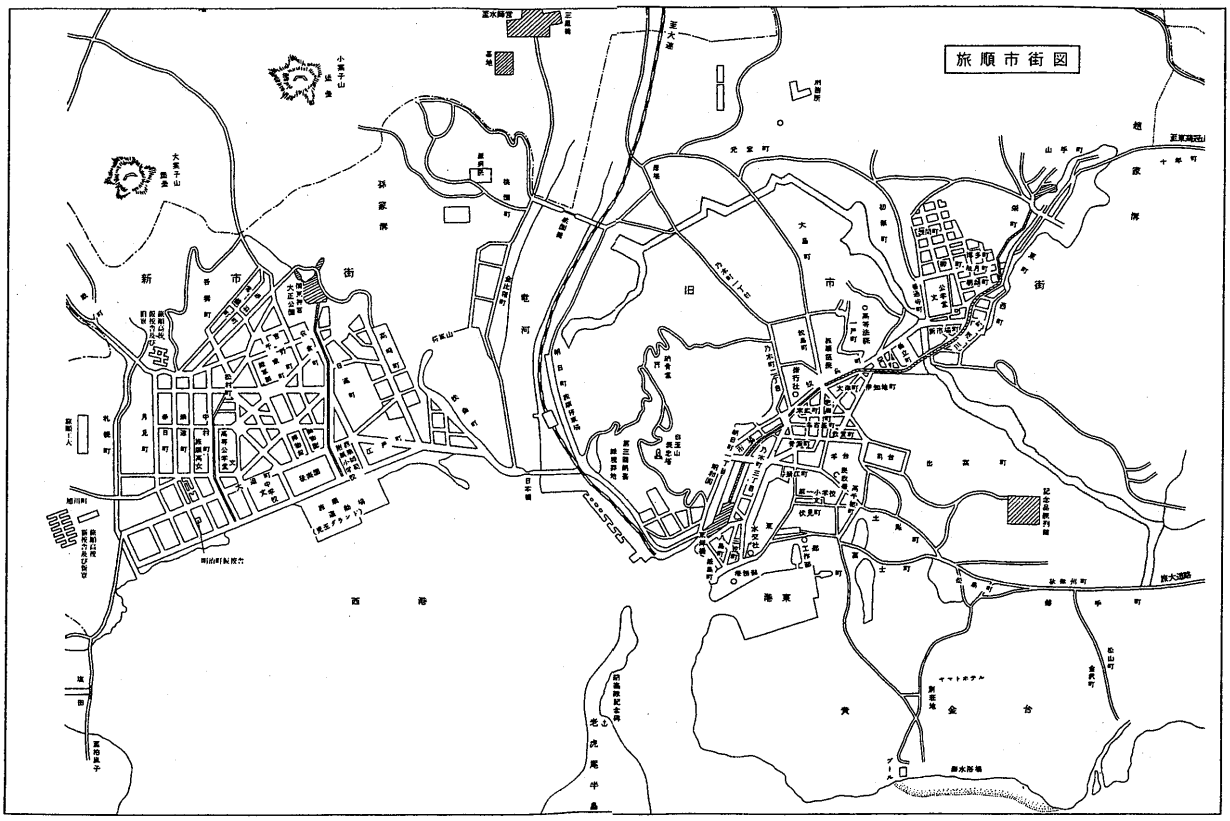

図2　旅順市街図（「向陽」2000から）

海上交通の要路であった。このように水陸行旅の順路になったので“旅順”の名になったという。この地は明の時代，長く軍の根拠地となった。清朝もここを要塞とし，水師営は清の太宗[2]が山東を攻略する際，艦船を出帆させたところで，康熙帝[3]の時代にはさらに営を設けて海陸の防備を堅くした。たが，1860年にはイギリス，フランス連合軍が占領して根拠地とした。旅順を軍港にしたのは光緒5年（明治12年，1877）李鴻章[4]の建策によったという。なお，“ポート・アーサー”の名はアヘン戦争後，イギイスの東洋艦隊がこの湾内を根拠地に利用したことにより，英国アーサー親王の名を付けたためと言われる。日清戦争の際，日本軍に占領されたが，三国干渉ののち，明治31年（1898）ロシアがこの地を租借し，難攻不落な海軍の要塞を築き，この不凍港を南下政策の拠点とした。日露戦争後は日本が租借したが，第二次大戦後の1945年8月末，ソ連軍が占領し，管理した。1955年5月，

2）清の太宗（1592－1643）は清朝太祖ヌルハチの第8子でホンタイジ（皇太極）である。1626年，太祖の死と共に後金国カン（汗）位についた。当時，後金国は戦争によって朝鮮との交易を断たれ，経営が困難であった。太宗は一時，山海関を境に明と和議を進めようとしたが，成功せず，やむなく朝鮮を討って屈服させた。内蒙古も平定し，満州国と称した。1636年，皇帝の位につき，国を清国と称した。しかし，明を攻めるため山海関を数回にわたって攻めたが，これを遂に抜きえず，1643年，中原への進出の志を遂げえぬまま没した。奉天の北陵に葬られた。

3）康熙帝（1654－1722）は順治帝の第3子で，清朝第4代の皇帝（在位1661－1722）であったが，清朝歴代皇帝の中で最も名君の誉れが高く，その孫の乾隆帝と合わせ，“康熙乾隆時代”と呼ばれた。明を滅ぼし，清朝の基礎を築いた。呉三桂らの三藩の乱を平定，ロシアと交渉してその東進を阻み，有利な条約を結び，外蒙古を平定，チベットを服属させるなど，清朝の興隆に尽くした。外は帝王，内は聖人とされ，“外王内聖”と崇められた。

4）李鴻章（1823－1901）。安徽省合肥の人で，道光27年（1847）進士となった。太平天国の乱のとき，曽国藩の幕僚となったが独立し，華北の捻教徒を平定した。清国の富国強兵に努めたが，官僚の腐敗によって成功せず，清仏戦争に敗れ，日清戦争にも敗れた。明治28年3月下関の春帆楼で，清国代表として日本側全権委員・伊藤博文，陸奥宗光と終戦の交渉をした。この会議から退出するとき，ピストルで撃たれるという事件が起こったが，休戦条約は調印され，朝鮮の独立，遼東半島，台湾全島の割譲，それに賠償金などを日本に支払う内容であった。こうして彼の政治生命は絶たれた。義和団事件に際しては講和折衝に当たり，講和成立後に病没した。

ソ連軍が旅順を撤退し，以後は中国海軍の要塞基地となっている。

・ロシア時代の旅順

明治30年3月，ロシアが関東州〈遼東半島南端の州〉を租借するや，旅順の軍備を急いだ。またロシアは隣接する青泥窪（ダルニー，大連）の築港にも努め，商業港とした。明治32年にはすでに旅順旧市街外郭の塹壕を整備し，軍事的な要塞とした。さらに市内の中国人を要塞部分から外に移住させたが，それは当時“支那新市街”と呼ばれていた。この場所は“太陽溝”と称されていたところで，現在の新市街である。この新市街と旧市街の間の交通は，大正公園の上の山を越えなければならなかった。ロシアは現在の旅順駅から日本橋に至る一帯を埋め立て，龍河に木橋（後の日本橋）を架けて海岸に道路を作り，新市街建設を計画した。ロシアは新市街の建設とともに西港の浚渫を日夜兼行で行った。新市街計画はアレキセーエフ大将がロシア皇帝に奏上した計画・設計によっており，中央部に広場（現在の博物館と旧司令部との間）を設け，その周囲に政府，軍，裁判所，銀行などを建築した。

日露の交渉が急を告げるに至り，当時旅順在留の日本人400名は牛荘日本領事の管轄下にあったが，明治37年2月7日，突然芝栗の水野領事から電報が来たり，「在旅日本人は全部引き上げ準備をせよ。本官は福州号を以って迎えに行く」とあり，これによって8日，英国船・福州丸が入港した。領事は上陸して，アレキセーエフ総督を訪れて，居留民を引上げることを告げ，日本人を乗船せしめ，大連に向った。残りの日本人がまだ旅順に留まっているとき，日本連合艦隊の砲弾攻撃が始まった。総督は，外国人は24時間以内に旅順を立ち去るべし，と命令し，彼らは指定された停泊中の温州号に乗船した。しかし，交通が禁じられたため，彼らは14日まで抑留された。こうして日露戦争が始まった（以上，旅順図書館，1936）。日露戦後，関東州は日本が租借することになり，建設が始まったが，多くの旧ロシアの建物はそのまま利用されることになった。その大略は表1に示す。

2．旅順の市内

旅順市街は龍河によって東西に2分され，主として商業区である東の旧市街と，学校の多い西の新市街からなっている（図2）。人口は昭和14年現在で日本人約1万3,000人，中国人（当時の満州人）約2万人，その他外国人，郊外の住人を加え，総人口約4万5,000人であった。筆者は終戦の1945年夏，旅順工科大学予科生徒として旅順にいたが，子供の頃，夏休みには家族とこの地に遊び，新市街のロータリー（松村町）から出るバスに乗って黄金台海水浴場へ行ったり，西港に船を出して釣りをするなど，楽しい思い出を持っている。まず，旅順の建造物を見てみたい。

・白玉山

旅順駅のすぐ東北頭上には，白玉を産したことに由来する白玉山が聳えている（図3）。その頂上には表忠塔が日露戦争後の明治42年（1909）建てられた。それは東郷元帥[5]と乃木大将[6]の肝入りによったという。表忠塔の内部は螺旋階段で上部まで登れる。山頂には納骨祠があり，日露戦争で戦死した日本軍2万人

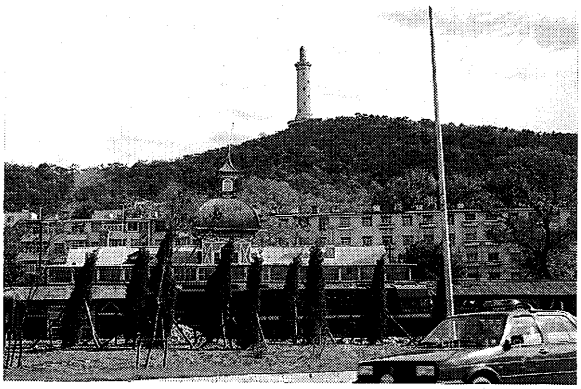

図3　旅順駅と後方は頂上に表忠塔が立つ白玉山（筆者撮影，2003年）

5）東郷平八郎（1848－1934）は鹿児島藩に生まれ，藩の海軍に入り，薩英戦争に参加した。その後，明治維新の際には戊辰戦争に従軍し，維新後，新政府の海軍に入り，イギリスに留学した。日清戦争では浪速艦長として出撃，日露戦争では連合艦隊司令長官とし旅順港の閉塞から1905年5月の日本海海戦を指揮してロシア・バルチック艦隊を壊滅せしめ，名将として名を挙げた。後に元帥となり，海軍の大御所として君臨，大きな影響を与えた。

6）乃木希典（1849－1912）は長州藩士の子に生まれ，幕末には幕府の長州征伐や戊辰戦争に参加し，明治維新後は新政府の陸軍に入った。明治8年，小倉の歩兵第十四連隊の連隊長心得となり，萩の乱，西南の役に参加，そのとき連隊旗を奪われた。その後，連隊長，旅団長，ドイツ留学などを経て，日清戦争に旅団長として従軍した。日露戦争では第三軍司令官となり，旅順攻撃に苦闘した。旅順の戦闘で二児を失った。戦後，軍事参議官となり，1908年，学習院院長となった。1912年，明治天皇の崩御に際し，静子夫人とともに殉死した。政治的野心を持たず，質素な生活態度に終始し，国民の人気を集めた。

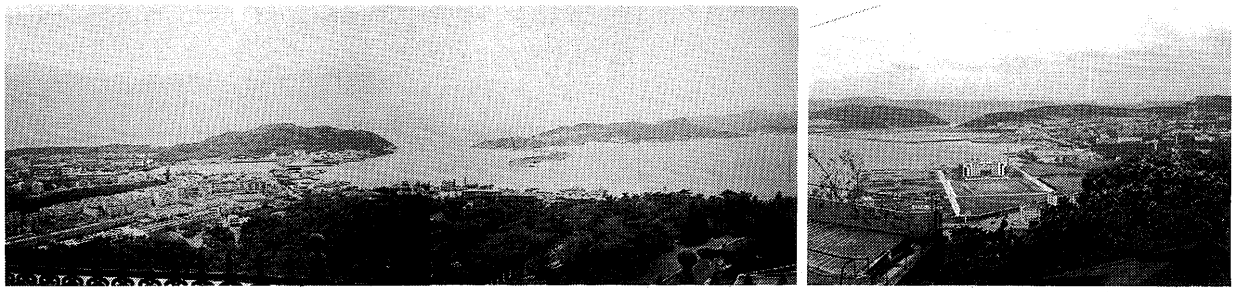

図4　白玉山山頂から眺めた旅順港。左：東港と旧市街，右：西港と新市街（筆者撮影）

余の遺骨が納められていた。この白玉山山頂からの旅順港の眺めは美しい（図4）。白玉山表忠塔は現在も残されている。山の中腹に“聖地会館”という一種のホテルがあり，筆者は子供の頃，夏休みなどを旅順で過ごすときよくこの聖地会館に宿泊した記憶がある。現在はない。

・旧市街

東洋橋を渡ると坂道の多い古い旅順の町並みがある。旅順要塞司令部のほか，町には乃木大将ら将軍たちに因んだ乃木町，伊地知町，大島町，などの他，軍艦の名を取った八島町，出雲町，松島町，初瀬町，あるいは富士町，など日本名を付けた町々が繁華街とともに連なり，高等法院，市役所，旅順第一小学校，赤十字病院，旅順医学専門学校，市場，劇場などがあり，旧市街の北には旅順監獄，旅順要塞戦利品陳列所がある（表1参照）。

灰色の軍艦が東港に浮かんでいるのが見える，坂の多い，日本の街に似た賑やかな町並みであったが，現在では古い町は消失し，ビルが乱立して昔の面影はない。しかし，東港には中国海軍の軍艦が数隻浮かんでいる。

海軍の施設などのうち，旅順要塞司令部は旧極東太守アレクセーエフの司令部，要塞司令部はステッセル将軍の官邸，海軍水交社はロシア海軍将校集会所，旅順病院（赤十字）はロシア赤十字病院，など，旧ロシアの建物を多く利用していた（表1参照）。

・新市街

龍川河口に架かる日本橋を渡って新市街に入ると（図5），大連に移る前の関東庁，のちの旅順師範学校附属小学校が西港の北にある。さらに西進すると旅順中学校があり，その間は後楽園という公園，南には児玉大将にちなんだ児玉グラウンドがある。公園の北には博物館，関東軍司令部，西へ進むとヤマトホテルとその北隣に旅順高等女学校がある。筆者の子供時代，父と同行したときにはこのホテルに宿泊した記憶がある。さら坂を北進すると粛親王邸，憲兵司令部，そして陸軍病院，のちの旅順第二小学校がある。この小学校は昭和12年，関東州庁が大連へ移転したため，そのあとに旅順師範学校が移り，小学校は師範附属小学校となって移転した。

師範学校について付言しておきたい（これは旅順師範学校女子部同窓会「爾霊会」代表・中溝陽子氏から伺った）。昭和11年旅順師範学校と旅順女子師範学校が創設され，女子師範学校は旅順高等女学校の補習科が前身で，同女学校内に設けられた。昭和15年，関東庁が大連に移転後，同所が旅順師範学校校舎となったあとの昭和18年，両師範学校は専門学校に昇格，統合され，旅順師範学校男子部（大迫町）と女子部（旅順高女と同敷地）になった。同時に，第二小学校後を仮校舎としていた新設の旅順高等学校が，完成した新築校舎に移転し，その後，この旧第二小学校（男子部校舎内で師範学校附属小学校となる）跡に女子部寄宿舎ができた（現存）。ちなみに，昭和14年，旅順医学専門学校が創設，旧市街・旅順病院（鮫島町）後ろの大島町に学舎ができた。

新市街を西北へ進み，春日町，さらに月見町を横切って丘を登ると旅順工科大学の美しい学舎（図6）がある。その南，予科校舎を出て南西には煉瓦作りの平屋，工科大学予科寮“興亜寮”がある。ここを東に丘を下ると工科大学グラウンドがある。興亜寮の南には旅順測候所，その南西には旅順高等学校がある（図7）。この新市街でも旧ロシアの建物を利用したものが多かった。すなわち，高等女学校は旧ロシア市役所，中学校はドイツ人商館，工科大学はロシア海兵団，関東州庁は市営旅館，粛親王邸はロシア人旅館，などであった（表1参照）。

旧市街と異なり，アカシア並木の美しい新市街の町並みは昔のままのように見え，ロシア，日本時代，そして中国，と用途は変わっても建物もほぼ残されている。

昭和13年，関東州の施政30周年を記念して，神社

表1　旧ロシア時代のおもな建物と日本時代の建物の関係〈旅順図書館，1936〉

旧ロシア時代	日本時代
「新市街」	
狙撃歩兵第10連隊下士官集会所	旅順第二小学校中央校舎
陸軍兵営と将校宿舎	月見町，明治町一帯の建物
海兵団	工科大学本館
海軍病院	旅順第二中学校寄宿舎
雑貨市場	十軒長屋
ロシアへ帰化した商人の商館	ヤマトホテル
ロシア写真館，市役所，料理店	旅順高等女学校
雑貨商店	旅順師範学堂
ドイツ商人の宿舎	同女子寄宿舎
ロシア人の旅館	粛親王邸
税務署	郵便局，旧参謀長官官舎
関東州民政庁	憲兵隊本部
旅館ニコバヅゼ	旅順中学校寄宿舎
陸軍参謀部	軍司令部
実業中学校	将校集会所
ドイツのデパート式商館	旅順第一中学校
将校集会所	博物館
市営ホテル	関東庁
「旧市街」	
副総督ウオウコフ少将官邸	関東庁長官官邸
中国人雑貨店	郵便局
海軍将校クラブ	水交社（海軍将校クラブ）
極東太守アレクセーエフ大将官舎	旅順市役所
小学校	旅順民政署
同教員宿舎	民政長官官舎
ステッセル将軍の最後の官舎	連隊長官舎
要塞司令部，一時将軍官舎	旅順要塞司令部
工兵隊兵舎	旅順公学堂
赤十字病院	旅順病院
陸軍病院	衛戍病院

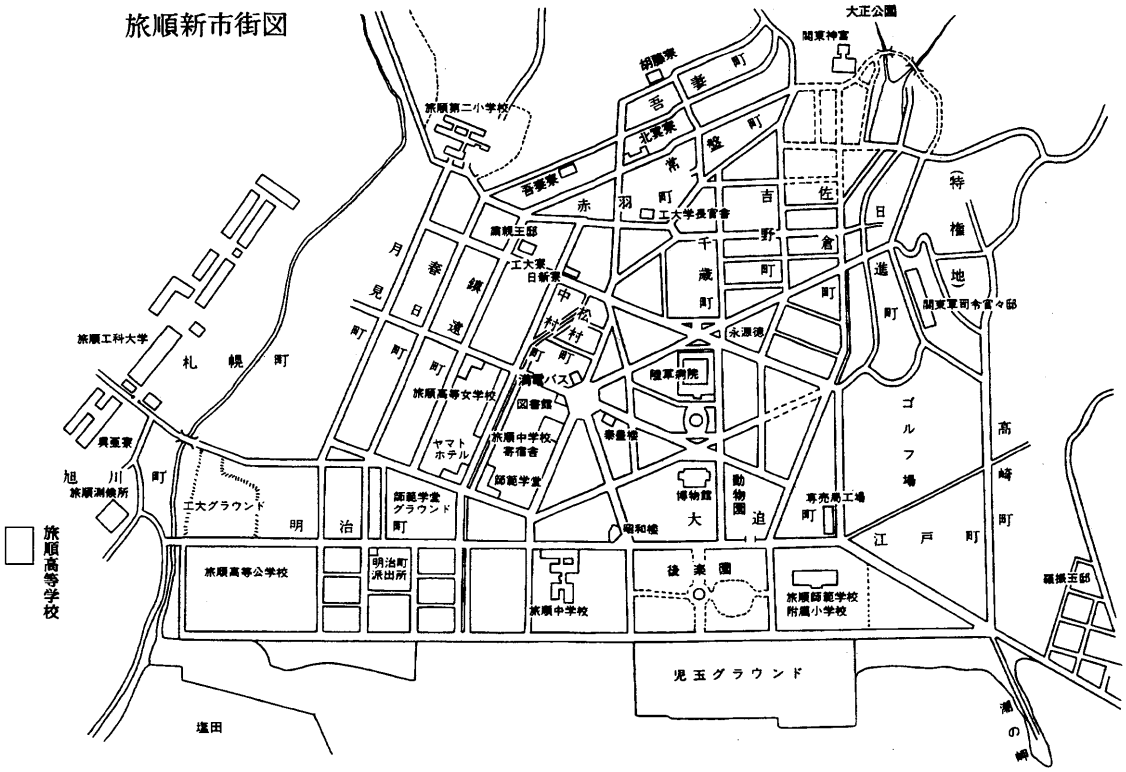

図5　新市街地図（「さらば大連・旅順」から）

図6　旧旅順工科大学本館。現病院（筆者撮影）

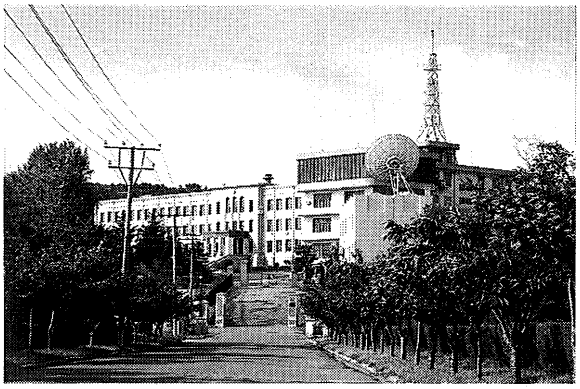

図7　旧旅順高等学校。現中国海軍司令部（筆者撮影）

創設の機運が高まり，願いが認められ，「官幣大社」が建てられることになった（佐藤益躬，1997）。当時の「内閣告示第3号」は次のように言う。

こうして昭和13年7月3日に「内苑地鎮祭」，15年5月4日「本殿立柱上棟祭」，16年6月26日「外苑地鎮祭」が行われ，総工費404万6,000円だったという。

昭和20年8月15日に敗戦，8月17日，「終戦奉告祭」が執行され，8月17日関東神宮廃止，更に11月22日付，外務省告示第11号，外務大臣・吉田茂の名で関東神宮は消失した。この時期，旅順の高等専門学校生徒は関東神宮に招集され，大本営の命令があるまで徹底抗戦するから，奮励努力せよ，と日本軍要塞司令部から通達された。もっとも，この命令はうやむやのうちに立ち消えとなった。

・戦　跡

日露戦争開戦とともに日本軍の補給路を確保するため，旅順港からのロシア旅順艦隊の出撃を防がなくてはならなかった東郷艦隊は，はじめロシア旅順艦隊の出港を待って攻撃しようとしたが，艦隊を殲滅するに至らず，ついに艦隊を港内に封じ込もうとした。旅順港を閉塞するため，明治37年2月以降，汽船を港口外に接近して自沈させようと3回にわたって試みた。よく知られているのは，第2回閉塞の際福井丸を沈めた広瀬武夫中佐の戦死である。この日露戦争緒戦の海戦については真鍋重忠（1985）に詳しい。この閉塞隊の壮挙はいち早く明治37年6月発行の「旅順口閉塞隊」という1冊に詳しく述べられている。筆者の手元になぜこの1冊が残されたのか記憶にないが，その“例言”は以下のように言う：

「旅順口の閉塞は，第三回に至りて，始めて其目的を達したりと雖も，連次三回の壮挙に於て，我が士気を発揮振作し，敵をして震概慌慄せしめ，同時に列強をして張目瞠若せしめたる，間接の功勲も，亦頗る大いなるものあり而して又我が海軍史上に，一大異彩を添へたるものに非ずや。……」

に始まり，“本記”では閉塞の先例が1898年の米西戦争の際に，サンチャゴ港にあるという歴史的叙述，閉塞隊指揮官，閉塞計画の由来，閉塞実行の時期，閉塞の結果，閉塞後の安全，海軍の教訓，について述べ，続いて第1回からの閉塞の詳細が記してある。ちなみに第1回からの閉塞隊指揮官と船名は次のとおりである：

「関東神宮　祭神　天照大神　明治天皇
関東州旅順市ニ創立シ　社格ヲ官幣大社ニ列セラルル旨仰出サル
昭和13年6月1日　内閣総理大臣　公爵　近衛文麿」

第1回閉塞（2月4日）

1．海軍中佐　有馬良橘
　　ほか合計17名　天津丸
2．海軍少佐　広瀬武夫
　　ほか合計16名　報国丸
3．海軍大尉　斉藤七五郎
　　ほか合計16名　仁川丸
4．海軍中尉　島崎保三
　　ほか合計14名　武州丸
5．海軍大尉　正木義太
　　ほか合計14名　武陽丸

以上総計77名の隊員で，敷島，朝日，笠置，初瀬，浅間，三笠，千歳，富士，などの諸艦からの志願兵であった。第1回閉塞は必ずしも成功とはいえなかったが，東郷司令長官がもっとも気にしていた閉塞後の安

全という点では成功し，全員が生還した。

第2回閉塞は3月21日に決行され，（1）総指揮官・有馬良橘海軍中佐（千代丸），（2）広瀬武夫官軍少佐（福井丸），（3）森初次海軍中尉（弥彦丸），（4）正木義太海軍大尉（米山丸）合計65名が旅順口に船を沈めた。この2回にわたる閉塞隊の働きにもかかわらず，ロシアの旅順艦隊は港口を出入し，閉塞の効果はなかった。この第2回閉塞の際に広瀬武夫少佐は戦死し，のちに“軍神”と崇められた。その時の情景を「旅順口閉塞隊」は次のように述べている：

「広瀬少佐の福井丸は，千代丸の左側を過ぎて少しく前方に進み，将に投錨せんとする時，敵の駆逐艦より発射したる魚形水雷命中したるが，この時杉野（孫七）兵曹は，爆発薬に点火せん為，恰も船倉に下りたる一刹那，敵の魚形水雷命中したれば，為に戦死して船は爆発沈没したるを，広瀬少佐は乗員を端艇に乗移らしめんとして，独り杉野兵曹の見えざるため，自ら再三船内を捜索したるが，船は漸く沈みゆきて，潮水上甲板に達したれば，已むなく端艇に移り，やや漕出せる折から，敵弾少佐の頭部を掠めて，少佐は肉片を留めたるまま海中に墜落し，壮烈極まる最期を遂げたり。」

この軍神・広瀬中佐（戦後進級）の壮烈な戦死はのちに次のように歌われた：

「轟く筒音，飛び来る弾丸
荒波洗うデッキの上で
闇を貫く中佐の叫び
杉野はいずこ，杉野はいずや」

沈没する船を去るとき，広瀬はかって留学したロシアで知り合ったロシア娘に“広瀬武夫此処にありと船の甲板に書き残したという。しかし，これらの閉塞戦法に対し，ロシア軍は警戒を強め，両岸の大砲の数を増やし，防御を固めた。日本海軍はさらに閉塞を完成しようと第3回の閉塞隊を出撃せしめた。このように，3回にわたる閉塞戦法もほとんど功を奏せず，結局は，後に占領した二百三高地からの観測により，北方から大砲を旅順東港に打ち込み，ロシア旅順艦隊を殲滅することができたわけである。この閉塞隊の記念碑が港口老虎尾半島側にあったが，今は撤去されている。

明治37年暮れにロシア旅順軍は第三軍に降伏し，乃木将軍派明治38年正月に旅順に入城した。このとき，いち早く「旅順降伏記念帖」が博文館から臨時に発行された。ここに旅順攻撃の詳細が記されている。その始まりは以下のように記述されている：

「我が奥大将の第二軍が，遂に南山の険要を陥れ，以て旅順口背面の第一関門を破りたるは，五月二十六日の事なりき。既にして僥勇無比なる乃木大将は，六月上旬を以て，攻囲軍指揮官として，奥大将に代わりて，金州城に入る。戦後荒涼の状，転た（註：うたた）人をして酸鼻せしむべきものあり。乃木大将蒼然として一詩を賦して曰く

山川草木転荒涼　　十里風醒新戦場
征馬不前人不語　　金州城外立斜陽」

まず，8月6日の薄暮，市の北方にある旅順要塞を攻撃開始，8月19日に第1回総攻撃を開始，さらに第2回総攻撃を行った。そして二百三高地の攻撃に至るが，「旅順降伏記念帖」にはこの二百三高地について次のように記している：

「標高二百三高地は，太平溝と石板橋との西北に当たり，清人は之を老爺山と称し，椅子山より高きこと八十米突，群嶺を抜きて巍然たり。山嶺に登れば旅順口全域は悉く眸中に入り，従って尤も攻め難くして，又特に奪はざるへからず。若し我之に領せんか，砲を備へて全塞を瞰射すべく，旅順の死命を制すべきものは，実にこの一塊の山丘に在りといふべく，敵も亦重きを茲に置きて，防備太だ厳重なり。」

10月26日から第3回総攻撃を行い，東鶏冠山砲台などを苦労の末攻略したが，二百三高地は陥落しなかった。有名な白襷隊を編成し，突撃を重ねたが，徒に戦死者を出し，占領できなかった。この時，総司令官・大山巌元帥[7]の参謀長・児玉源太郎大将[8]が旅順に赴き，大口径の攻城砲を設置して高地を攻撃，遂にこれを落とした。これにより旅順東港のロシア艦

7）大山巌（1842－1916）薩摩藩士に生まれ，西郷隆盛の従兄弟にあたる。戊辰戦争では薩摩藩の砲隊長として参加した。明治4年フランスに留学，帰国後，陸軍少将兼陸軍少輔となった。西郷が征韓論に敗れたので，大山は陸軍部内で薩閥のリーダーとなった。以後順調に累進し，1880年陸軍卿，さらに陸軍大臣，陸軍大将，と進んだ。日清戦争では第二軍司令官として出陣，その後陸軍元帥，参謀総長となった。日露戦争に際しては満州軍総司令官としてロシア軍を撃破した。その後，死去の年まで宮内大臣を務めた。明治陸軍を薩長に2分した巨頭であったが，陸軍の実権はつねに長州の山県有朋に握られた。

8）児玉源太郎（1852－1906）は長州徳山藩士に生まれ，17歳で戊辰戦争に参加し，明治維新後，陸軍に入った。1885年，参謀本部第一局長となり，陸軍兵制の近代的改革の中心となった。つづいて陸軍大学校長となり，ドイツ式陸軍の移入に努めた。日清戦争では大本営留守参謀長となり，台湾総督，1900年，第四次伊藤博文内閣および桂太郎内閣で陸軍大臣などを勤めた。日露戦争では満州軍総参謀長として作戦を指導し，大山総司令官を補佐，旅順攻撃では乃木第三軍司令官を助けた。戦後，参謀総長となったが，現職のまま死去した。明治陸軍では最も優れた軍略家であった。

図8　乃木大将とステッセル将軍会見図（「旅順降伏記念帖」から）

隊は砲撃により殲滅され，旅順は陥落した。明治38年（1905）1月2日，郊外水師営において敵将ステッセル（Anatolii Mikhailivich Stessel, 1848－1915）[9]と乃木将軍が降伏の会見をした（図8）。

数万にのぼる第三軍兵士が戦死した堡塁戦場，東鶏冠山堡塁，大案山子堡塁，椅子山堡塁，は旧市街北方郊外に連なっている。また，旅順攻略の決め手となった新市街北郊外の二百三高地は山頂に乃木将軍命名の“爾霊山”の字を刻んだ弾丸形の高い碑が立っている（図9）。二百三高地も公園化され，中腹にみやげ物店ができ，かっては乃木大将の“山川草木うたた荒涼……”の詩のような禿山の光景はなく，“爾霊山”の弾丸形の塔が残るだけである。

また，ロシア軍降伏後，乃木・ステッセル両将軍会見の地，“水師営”が北郊外にある。会見の場となった民屋と庭のナツメの木もある。この会見を描く歌があった：

「庭に一本（ひともと）棗（ナツメ）の木
弾丸跡も著るく
崩れ残れる民屋に
今ぞ会い見る二将軍」

水師営の会見所もかっての田舎の一軒屋でなく，記念碑や民屋が改装されたのか，昔の面影は変わってしまった。棗の木も当時のものかどうかわからない。

東鶏冠山の戦跡は今や観光地となり，道順がついて，かっての生々しい戦場跡は失われた。展示館があり，

図9　現在の二百三高地（筆者撮影）

日露戦争当時の戦いの様子を模型で示している。このように，かっての侵略国日本を非難する中国がこのように戦跡を観光地として残すのは理解に苦しむが，筆者のように当時かの地にいた者には懐かしい。

なお，日露戦争の勝利は当時の国際列強の一つであった大国ロシアを破るとは誰も想像していなかったため，国外はもとより，日本国民を狂喜させた。大正15年には「戦蹟と旅順」が発行され，筆者の手元にあるこの写真集には戦跡をはじめ，当時の建物の写真が掲載されている。また，戦後にも日露戦争に関する写真集が出版されている（たとえば酒井修一，1988）。また，当時の旅順については服部勘太郎編の「旅順案内」（1937）がある。

3．旅順工科大学と旅順高等学校

この軍港・旅順には日露戦争後，日本の学校が多く建てられた。隣接の大連は大きな都市であったが，高等教育機関としては南満州工業専門学校（南満工専），大連商業専門学校，それに多くの小学校，中学校，女学校があっただけである。小さな旅順には工科大学，高等学校，師範学校，医学専門学校などの高等教育機関のほか，中，女，小学校があった。表2にこれらの学校名と住所，および現在の中国による用途を示す。この軍港であり学園都市であった美しい旅順の代表として旅順工科大学予科と昭和15年創設の，官立最後

9）ロシア帝政期の将軍で，日露戦争当時，旅順軍司令官であった。旅順陥落の責任を問われ，軍法会議で死刑を判決されたが，のちに減刑され，最後に釈放された。

表2　旅順の学校と所在地（服部勘太郎，1937；「旅順第一小学校白玉会」から）

学　校　名	創設年	所　在　地	現在の用途（中国）
旅順工科大学	1922	新市街　札幌町	海軍406病院
旅順高等学校	1940	同　旭川町	海軍基地司令部
旅順医学専門学校	1939	旧市街　大島町	海軍基地後勤部
旅順師範学校	1936	新市街　江戸町	陸軍休所
旅順女子師範学校	1936	新市街　中村町	81540部隊招待所
旅順中学校	1909	同　大迫町	81540部隊
旅順高等女学校（師範女子部）	1910	同　中村町	81540部隊
旅順第一小学校	1905	旧市街　伏見町	海軍二場地
旅順第二小学校	1909	新市街　月見町	大連市第五十六中学
師範附属小学校（第二小学校が関東庁跡へ）		新市街　大迫町	

の旧制高等学校・旅順高等学校を紹介したい。ちなみに，旧制帝国大学進学のための学校として日本全国に約40校の高等学校があった（秦郁彦，2003）。また，北海道帝国大学，京城帝国大学，台北帝国大学，旅順工科大学，満州医科大学，それに日本内地では，東京商科大学〈後の一ツ橋大学〉，大阪商科大学（のちの大阪市立大学）などには高等学校に対応する予科が置かれていた。

まず，旅順工科大学予科の寮歌“唐紅の花衣”と，旅順高等学校の寮歌“北帰行”の歌詞を記しておきたい。

「唐紅の花衣」

1．唐紅の花衣
茗荷の名は妙なれど
麝香の香名残にて
野薔薇散り行くいささ川

3．嗚呼残塁の緑萌え
池水に匂ふ白蓮の
葉に置く露や空に凝り
咲いて煌く星一つ

5．いざもろ共に紫の
葡萄の酒の盃に
玉盃遂に倒るまで
共に祝はんその誉
共に祝はんその誉

「北帰行」

1．窓は夜露にぬれて
都すでに遠のく
北へ帰る旅人ひとり
涙流れてやまず

2．建大　一高　旅高
追われ闇をさすらう
汲めど酔わぬ恨みの苦杯
嗟嘆ほすに由なし

3．富も名誉も恋も
遠きあこがれの日の
淡きのぞみはかなき想い
恩愛我を去りぬ

4．わが身容るるにせまき
国を去らんとすれば
せめて名残の花の小枝
尽きぬ未練の色か

5．いまは黙して行かん
何をまた語るべき
さらば祖国わがふるさとよ
あすは異郷の旅路

「官立旅順高等学校四十年史」155ページに宇田博自筆の歌詞が掲載されている。現在，「北帰行」は演歌でとして歌われているようであるが，歌詞といい，メロディーといいかなり宇田博（筆者の小学校先輩）作詞作曲の原曲とは異なっている。図10に両校の校章を示す。

図10　旅順工科大学予科（左）と旅順高等学校（右）の校章

両校は歴史が年数において異なるだけでなく，校風，学校としての役割も異なるが，日本の戦時体制のなかで翻弄されながら学問に努め，最後は敗戦国日本と運命を共にしたという点では同様であった。両者の年賦を表3で比較したい。

・旅順工科大学

旅順工科大学の前身旅順工学堂の歴史は古い。資料（旅順工科大学同窓会，2000；旅順工科大学掉尾会，1990）にしたがってこの大学について概観したい。

1908年（明治41年），関東都督・大島義昌から当時の首相・桂太郎へ旅順工科学堂創立覚書を提出，1910年に開設，日露戦争中のロシア海兵団の赤レンガ3階建ての建物を学舎とし，3階に並んだベッドを寄宿舎とした。同年4月20日に始業式を行い，機械40，電気39，採鉱冶金38名の117が入学した。初代学長は関東都督府民生長官を本職とする白仁武であった。白学長は名が中国人のようだったので，中国の人たちと協調しやすかったという。1911年，新入生が加わったため，本館3階の寄宿舎が狭くなり，隣接の実習工場予定地に寄宿舎を建設することになった。予算3万5千円で東，中，西寮が完成し，1912年3月

表3　旅順工科大学と旅順高等学校の年賦（「平和の鐘」および「向陽」2000，から，太字は両校および日本全国の大学予科，高等学校に共通事項）

年	旅順工科大学	旅順高等学校
明治42年	旅順工学同官制発布， 白　仁武学長就任	
43年	開学117名入学	
45年	寄宿舎落成，本館3階より移転	
大正2年	第1回卒業式，卒業生73名	
6年	白仁学長転任，富田学長就任	
11年	旅順工科大学官制発布 富田学長戴冠，土岐学長事務取扱	
12年	予科1回生入学式，定員80名 土岐学長事務取扱退任，予科主事神谷豊太郎学長事務取扱	
13年	神谷学長事務取扱退任，井上嬉之助学長就任	
昭和4年	大学1期生4名卒業	
6年	井上学長退官，野田清一郎学長	
7年	予科，思想事件発生	
12年	**日支事変起こる〔7月〕**	
14年	予科，勤労奉仕作業 航空学科開設	
15年	興亜寮チフス患者発生，寮閉鎖	4月開校，校長川瀬光順，静岡高から関東庁あとへ移転の第二小学校あとを仮校舎，仮寮とする
16年	野田学長退官，安達禎学長就任 伊東予科主事現任，後任宮島清 17年3月卒業予定の学部生，12月に年限短縮で卒業	第2回生，入学式，入寮 宇田博，性行不良のため退学，旅順の旅館で「北帰行」作詞・作曲 教練，独立科目となる
	対米英宣戦布告（12月）	
17年	**学徒出陣令〔1月〕**	
	臨時教員養成所開所	新寮の一部，向陽ケ丘に完成 新校舎に移転，制服は国防色，戦闘帽 第1回生2年6ヶ月で卒業（7月）
18年	**予科，高等学校18年入学生徒から修業年限2年に**	
		新寮「向陽学寮」完成，第4回生入寮 第2回生卒業〔7月〕，川瀬光順校長逝去，校葬〔11月〕
19年	予科1，2年生満鉄沙河口工場へ動員	校長行元豊円，浦和高から，第5回生入寮，新校舎完成
	予科，高等学校入試中止，中学校内申書により合格決定	
		第3回生卒業（8月）
20年4月	予科1年生の入学延期	
5月	「戦時教育令」で学徒隊	文科5回生に入営命令書
6月	予科1年生の動員修了	第6回生入寮，入学
7月	予科1年生入学式 同　興亜寮入寮 同　授業開始	
8月8日	**ソ連，対日宣戦布告，満州に侵入**	
8月12日	**国土防衛召集令により18歳臨時召集**	
	（予科生約20名部隊へ）	
14日	**満17歳に教育召集令状，15日入隊**	
15日	入隊中止　**終戦詔勅**	入隊中止，退寮命令
22日	**西港にソ連軍飛行艇進駐**	
23日	海軍特別根拠地隊，本館へ移転	
25日	最後の大学卒業式	
9月4日	海軍，旅順駅より出発，興亜寮接収	
5日	大学校舎ソ連軍に接収，母校閉鎖	
下旬	**日本人，新市街から旧市街へ移転**	
10月3日	**日本人の旅順より大連へ立退き命令**	
12月31日	第2回引揚船にて城野教授ら代表として引揚げ。	

に完成，4月に第3期生を迎え，全寮制が始まった。

大正5年，日支学生共存に着手，工科学堂予科（後の予備科）が勅令により設置された。大正7年，白仁武学長が文部省に転任，富田忠詮が関東庁，文部省と折衝し，工学堂を工科大学へ昇格する運動が開始された。大正12年，富田学長は免官となったが，工学堂は工科大学に昇格，大正12年3月には内地各高等学校に先んじ，理科甲類に倣って選抜試験を行った。試験は難関で，最初から15倍の競争率であったという。予科の定員は60名であったが，予備科の中国生徒を10名加え，35名ずつ2組を各学年の定員とした。

予科のできた大正12年に内地で関東大震災が起こった。

大正10年（1921）に奉天にあった南満医学堂（のちの満州医科大学）と野球の対抗戦が始まり，このときに大正2年以来歌い継がれた「唐紅の花衣」が応援歌として歌われたという。

昭和に入ってからは不景気が続き，日本全体が沈滞したが，昭和6年に勃発した満州事変を契機に満州における鉱工業が進展し，大学は昭和11年（1936）応用化学科を設立した。こうして卒業生は興亜の技術に貢献した。さらに昭和14年（1939）航空工学科増設が実現した。こうして旅順工科大学は戦時色に染まり，学生は国家の方針にいやおうなく従っていった。

・最後の予科生

敗戦による廃校前の旅順工科大学の学長は安達禎（文部省督学官，昭和16年4月から学長）で，戦後山梨大学長になった。また，予科長は宮島清教授で，昭和16年から予科長になったが，昭和18年，学生主事を兼ねた。終戦の翌年，宮島教授は大連で死去した。白い顎鬚をつけていた予科長の姿は今も覚えている。

筆者らは最後の予科1年生で，中学校を昭和20年春，4年生修了のまま卒業とされ，軍関係へ進む者も多かったが，旅順工科大学予科にも数人が入学を許可された。このクラスには満州，中国，朝鮮などの中学校出身者だけでなく，日本本土からも数人の生徒が入学した。この年，入学は4月でなく，夏まで母校に所属したまま勤労動員に駆り出された。

この“最後の予科生の歩み”は湯沢宏（「平和の鐘」から）によって以下のように記録されている。

1月初旬	合格通知
4月 2日	3月に中学4,5年生が同時卒業，高専への入学が延期され，3ヶ月間の勤労動員継続。関東州，中国等出身者は関東州学校報国隊として三潤堡で海軍飛行場の建設に従事。5月から高専別に編成替。満州，朝鮮出身者は地元で6月25日まで動員。
6月16日	勤労動員修了，興亜寮に入寮。一部授業開始。
6月26日	盛家溝の練成道場（関東州学徒錬成所）入所，農耕作業に従事。
6月30日	満州，朝鮮出身者が興亜寮に集合，練成所に合流。
7月 2日	興亜寮に帰寮，身体検査。
7月 3日	工大本館行動で入学式，学長訓示。
7月 4日	再度練成所に戻り，農耕作業。
7月13日	興亜寮帰寮，寮監は草嶺助教授。
7月14日	予科校舎で授業開始（午前学科，午後教練，作業）
（8月 8日	ソ連，宣戦布告）
8月11日	血判状事件（喫煙で退学処分反対）
8月12日	午前4時非常呼集，予科1年で20数名に臨時召集令状，即日応召（前年観閲点呼を受け満18歳になった者が国土防衛召集令により第2国民兵として召集）。午前8時，旅順駅出発，四平，金川へ。19日召集解除，20日旅順帰着（予科2年，工大の先生方もいた）。
8月14日	満17歳以上のものに教育召集令状10数名，旅順国民学校に入隊，17日解散。満17歳以上の者全員に翌日午後入隊の召集令状（終戦のため中止）
8月15日	正午に興亜寮玄関前に集合，（玉音）放送を聞く
8月22日	西港にソ連軍飛行艇が着水，ソ連兵進駐。
8月23日	海軍特別根拠地隊が工大本館へ移転。
8月24日	海軍家族が興亜寮中寮に移転，女子師範学生40名避難一泊。
8月27日	旅順高女4年生が興亜寮に避難。
9月 4日	海軍，午前9時旅順駅出発，興亜寮午後1時までに退去命令，学部寮等に分散。
9月 5日	大学本部，関東神宮へ退去。

こうして，予科生は「在学証明書」を交付され，それぞれ旅順に留まり，あるいは大連などに帰省した。内地から入学したものはその後の生活に苦労した。筆者の興亜寮に関する記憶は，授業より畑仕事などが多かったこと，教練も多かったが，中学時代に比べ，配

属将校（築山大佐？）が寛容で，随分いい加減に教練の授業を受けていたような記憶がある。また，寮の食事は連日，太刀魚と蕗が多く，炊事当番がリヤカーを引いて旧市街の市場に買出しに行ったように思う。

興亜寮は東，中，西，北の4部からなり，北寮のみが2階建てであった。記憶力抜群の湯沢宏君の記録（「掉尾を飾る」）によると，筆者の小・中・予科の後の松山高校時代の友人たちは：峰八十吉（中寮5室），増田芳雄（中寮6室），湯沢宏（中寮8室），佐々木恭輔（西寮9室），広瀬和夫（不明）であった，と記録「掉尾を飾る」にある。鉄製の大きなベッド（ロシア時代からのもの？）を大寝室に並べて1クラス全員がやすみ，廊下を隔てて1クラスに2室ずつの自習室に半数ずつ机を並べて勉強した。消灯後，毎夜のように上級生が太鼓を鳴らし1年生の寝室を“ストーム”と称して襲ってくるので，これが終わらないとおちおち眠れなかった。「平和の鐘」の“興亜寮の生活”の章に興味ある記述があるが，そのなかに昭和17年卒業の朝枝周爾氏が「興亜寮を中心とした旅順時代の思い出」を書いておられる。その文のなかに“興亜寮七不思議”と題し，

「光風閣風呂側廊下入り口の横にあった開かずの小部屋，一体何があったのだろう。」

に始まり，興亜寮の7不思議が並べてある。夜，トイレに行って小便をしていると，後ろから肩を叩く者がおり，振り返るとそれはコサック騎兵だった，という話を筆者は聞いたことがある。

今も脳裏に焼きついているのは終戦の日の玉音放送であった。興亜寮玄関前に正午集合し，ラジオで天皇陛下の終戦直後の玉音を聞いたが，雑音が多く，内容はよく聞き取れなかった。終わったとき，寮生の一部は，天皇は国民に戦争遂行のため一層の努力を求められた，と言い，他の者は，降伏するための勅語だと言った。寮監の先生は，“日本は負けたんだ！”と叫んで涙を流して寮生に告げた，と筆者は記憶している。筆者は部屋に戻った後，級友たちと町へ出てみようと，丘を下って新市街へ向かった。途中，中国人の民家に中華民国の青天白日旗が掲げられているのに一同気づき，戦争中には考えられなかった情景なので，“負けたんだ”と実感したことを覚えている。その後，旅順の生徒たちは関東神宮に集合させられ，海軍の将校が，大本営から降伏の命令を受けていないから，ソ連軍が来たら戦うのだ，お前たちも戦え，と命令された記憶がある。8月21－2日ごろ，ソ連軍の飛行艇に続き，多数の巨大な戦車に先導されたソ連の陸軍（囚人兵といわれた）トラックが刺青をした兵隊を満載して旅順の町に侵攻して来た。これら獰猛な囚人兵たちがトラックの上で混声合唱をしていたのが不思議であった。巨大な戦車や獰猛なソ連兵を見たとたん，われわれの戦意はたちまち失われた。8月23日，海軍が工大に移ったとき，予科生は引越しを手伝ったが，後でお駄賃に海軍乾パンと粉ミルクを支給してくれた。陸軍の小さな不味い乾パンと違い，海軍の乾パンは大きく，美味かった記憶がある。

筆者は9月4－5日ごろ，予科や旅順高等学校の友人たちと，大連を経て奉天の実家に帰り，翌年の引き上げまで無為に過ごした。なお，2003年秋，旅順を再訪して工科大学を訪れたとき，本館は再び病院として使われていたが，予科の建物は変わっており，誠に残念ながら興亜寮は撤去され，無残にも瓦礫だけが残っていた。

予科興亜寮のほか，学部学生寮として新市街各所に「吾妻寮」，「北冥寮」，「常盤寮」，「清明学舎」，「胡藤寮」，「日新寮」，「若草寮」，「明治寮」，「和楽園」および「燈影寮」があった。興亜寮退去のあと，残った予科寮生はこれら学部寮に割り当てられ，分散させられた。

旅順工科大学は，昭和20年すなわち戦争の終わった年に“旅順帝国大学”に改称される予定であったことを筆者が知ったのは松本においてであった。同地の松本高等学校跡に設置された“旧制高等学校記念館”の展示のうち，旅順工科大学のところに帝国大学昇格，のことが記してあった。第10番目の帝国大学になることを逸したのは惜しい。

大部分の生徒は翌年の昭和21年（1946），内地に引き揚げ，それぞれ内地の高等学校や専門学校に転入したが，それには城野和三郎教授（戦後は神戸大学教授）らの転入復学運動に負うところが大きく，「平和の鐘」に昭和20年下期卒業の西山圭三氏の「転入復学への井戸掘り」という記録がある。

昭和18年頃から，理科系学生の徴兵延期が停止され，学部学生，予科生が次々と応召し，前線へ出征した。記録によると，卒業生，在学生で応召により，終戦前後に戦死あるいは戦病死した者の数は40名に達した。

「掉尾を飾る」に“青春の軌跡”を記した山中昭俊氏の文を以下に抜粋する。

「8月25日，とうとうソ連太平洋艦隊が旅順港に入ってきた。旅順の日本人は屋外に出るものもなく，鍵を閉めて息をこらしている。中国人による保安隊が

いつの間にか出現し，町を練り歩いている。旅順警備府や海軍の施設，建物が接収されたので，司令官の中将以下の海軍軍人や，その家族たちが旅順工大の本館を宿舎にと，トラックや荷馬車での移動でごったがえしている。旧市街の瀬戸物屋の娘さんが強姦されたとか，どこどこの娘さんが連れ去られたとか，日本人の心胆を寒からしめる話ばかりである。ソ連軍が来てからは授業もなく，大連行きの列車，バスも止まり，満州出身者は帰省することもできず，興亜寮生活が続いた。女子師範，女学校の寄宿舎生も興亜寮に移ってきた。明治43年開学依頼，寮祭以外女人禁制だった興亜寮も，女子学生や海軍の家族たちにより，華やかに，騒々しくなった。最初はソ連兵も野郎たちばかりの寮には入ってこなかったのだが，海軍さんの監視がてら入ってくるようになった。各寝室，自習室に入り，机，物入れ，フトン袋，カバンなど手当たり次第かき回し，「チャスイ　ダバイ・ジェンギ　ダバイ」を連発し，時計・財布などを見つけると一つ残らず持っていく。イワノフ中将が来てからは彼らの風紀もやや良くなり，進駐時のような暴行も少なくなった。学部の学生？が日本刀でソ連兵を傷つけてからは，日本刀はもちろん小刀一つでもうるさくなった。暫くすると海軍さんたちは「ソ連軍の命令により，明朝9時旅順駅出発，行き先不明」* との発表があった。

（＊海軍さんの行き先はシベリアであった）

海軍さんたちは覚悟していたらしく，酒やハム，ベーコン，缶詰などを出してきて，飲みだす。私たち予科生の当番も呼ばれ，一緒にご相伴にあずかる。若い士官の人から，「君たちは必ず内地に帰れるのだから」といって内地の家族の住所を書き，「今の様子を話して欲しい」と頼まれたが，残念なことにソ連兵の荷物引っ掻き回しのため無くしてしまった。士官の軍刀は一振りしか携帯を許されないとのことで，二振り以上持っている士官たちは，私たちに呉れたり，目釘を抜いて塩水につけたり，石に叩きつけ，刃こぼれさせる士官もいた。9月4日，旅順駅に出発の海軍さんを見送って帰寮すると，今度は興亜寮がソ連海兵隊？に接収されると聞かされる。寮生は200人近くいたであろうか，全員学部の寮に分散することとなった。（後略）」

筆者の友人で，小学校同級の広瀬和夫（奉天第一中学校），中学校同級の峰八十吉，山本禮，湯沢宏，戦後松山高校で一緒になった佐々木恭輔の諸君が旅順工科大学予科にいた。また，終戦時に学部1年だった笠間太郎氏は戦後京都大学理学部地質学科を卒業，筆者と同じ大阪市立大学理学部に勤め，ご交誼を頂いたが，退官前に無くなった。同様に，山本，佐々木両君もすでに鬼籍に入られた。

・旅順高等学校

旧工科大学と旧興亜寮を隔てる道から南西は現在では中国海軍の施設になっており，立ち入り禁止である。旧旅順高等学校の建物は，現在は中国海軍司令部として使われており，近づくことはできず，門外からかっての建物を垣間見るしかできないのは残念である（図7）。

日本の官立高等学校としては最後の学校で，昭和15年創設である。満州各地から多くの秀才が集まり，他の内地高等学校と同様に，卒業生は内地の帝国大学へ進学した。以下の記述は「官立旅順高等学校創立四十年史（1980）および「向陽」（旅順高等学校創立六十周年記念特集号，2000）から引用した。その歴史は以下のとおりである（表1）。

満州国建国以来，在満日本人の人口が増加し，教育上，国策上，高等学校の設立の必要性が痛感され，昭和15年の実現を目標とし，予算提出中のところ，3月15日，議会を通過し，旧制官立最後の高等学校が発足した。初代校長には川瀬光順が，三高，静岡高，新潟高を経て旅順に赴任した。しかし，川瀬校長は昭和18年11月14日に逝去した。川瀬校長は校舎の所在地名を“向陽が丘”と命名したため，同窓会は向陽会と称する。また，校章は満州国駐在特命全権大使・梅津美治郎が制定した。

第1回入学試験は旅順，新京，東京，福岡で実施，受験者総数は1,389名であった。クラスは文甲，文乙，理甲が各1学級，理乙2学級とし，総計5学級，1学級40名以内，総計200名以内となった。教授11名，生徒主事1名，助教授2名，書記4名の教職員であった。関東庁が大連に移転し，そのあと旅順第二小学校が旅順師範学校附属小学校となったので，第二小学校あとを旅順高等学校仮校舎とした。また，生徒寮は仮校舎の一部を改造して誠修寮となった。この頃，文部省は「修練強化に関する通牒」を発令し，全国の高等学校，大学予科は戦時の影響を受け始めた。はじめ校舎は旅順第二小学校を仮校舎として用いることになり第1回生の授業が開始された。翌年，第2回の入学試験が行われ（受験者総数1,772名），教職員の増員が認められ，教授は23名，助教授3名，書記5名，生徒主事補1名となった。この年，文部省は「対外試合禁止令」を出し，また「青少年学徒に賜りたる勅語」

下賜式典などがあり，ますます戦時色が強くなった。

旅順工科大学予科のように先輩が多く，伝統がある学校と異なり，旅順高等学校は戦時の昭和15年に創設され，時あたかも紀元2600年の国家的祝賀が行われた。昭和17年には「学徒出動命令」が発令され，時局の要求により，文部省は「高等学校高等科生徒定数の臨時特例」が交付され，定員が増加された。この年，新校舎，向陽学舎が一部完成，さらに寮の一部も完成した。また，教職員の増員も認められ，教授38名（15名増），書記6名となった。

翌昭和18年には戦時体制が進行し，「高等学校，学年短縮要綱」により，第1,2回生は2年6ヶ月で卒業し，この年の入学制から修業年限が2ヵ年となった。また，年末には「徴兵適齢期1年繰り上げ，満18歳の徴兵検査は満17歳」と閣議で決定され，さらに「緊急学徒勤労動員方策要綱」が閣議決定された。この年11月14日，川瀬校長が逝去され，朝日方円教授が校長心得となった。

昭和19年1月，浦和高等学校教授・行元豊円が校長に任命された。この年，第5回入学試験が行われ，文甲，文乙の類別廃止，文科は1学級のみとなった。理甲は3学級，理乙は1学級の合計5学級となった。そして，同年7月，文部省は高等学校入学者選抜試験を中止と決定し，さらに理科系学徒の徴兵延期廃止となった。その結果，高等学校，大学予科の生徒は理系でも徴兵の対象となり，在学中に兵隊に取られる事になった。4月に新校舎が全館完成した。8月には第3回生が繰り上げ卒業，第1,2回生と同様，2年6ヶ月の修業であった。ところで，行元豊円校長は，昭和16年まで松山高等学校の倫理の教授で，つとに保守的，軍国主義的な評判があった。次いで浦和高等学校に転じ，18年，旅順に栄転した。戦後は松山へ引き揚げ，松山高等学校へ顔を出し，旅順高等学校から転入した生徒から敬遠されていた。

昭和20年入学者には入学試験を課さず，中学校の内申書だけで合否が決定されることになった。その結果，第6回入学者は，入学試験を受けずに合否決定，文科1学級，理科は7学級，内理甲5学級，理乙2学級，合計8学級となり，旅順工科大学予科と同様，7月入学となった。

昭和20年8月15日，終戦の詔勅が発布，旅順には8月18日，ロシア軍が進駐，8月28日，全員学校と寮を退去し，旅順高等学校の短い歴史は終わった。

・最後の旅順高等学校生徒

工科大学最後の予科生と同様，最後の旅順高校生も終戦時に同じ経験をした。以下に最終在校六回生の回顧録「ただ過ぎに過ぐるもの」から山下信氏（筆者と小学校同級，奉天第一中学校出身）の一文を抜粋して以下に記述したい。

「入学式は7月1日であった。前日向陽学寮に入寮した。寮は丘陵に建てられて5棟あった。それぞれの棟は傾斜地に沿って段階になっていた。私の部屋は最上段の棟にあった。前は見渡す限りリンゴの樹で，青い実があふれていた。同室の友は全員理乙Aで50音順であった。何人いたかは忘れたが，今でも覚えているのは，森永誠さんと吉田極君である。吉田君*は4卒である。いつもドイツ語の歌を歌っていた。聞くとSchubertの「Winterreise〈冬の旅〉」とのことであった。ドイツ語の定冠詞を覚えた頃に，彼はドイツリートを歌っていたのである。「Gute Nacht〈お休み〉」，「Der Lindenbaum〈菩提樹〉」……教えてくれた。私にとって新しい世界だった。吉田君は松山高校に転入学した。松山高校にいた私の友人は「彼は音楽では天才で，すばらしいバリトンでシューベルトの歌曲を歌うだけでなく，ヴィオラを奏し，指揮もした。吉田君の「魔王」の歌声は今も耳に残っている」と書いている。

（＊この吉田君は筆者と松山で同期になり，一緒に音楽部で親しかった。この“私の友人”とある部分は筆者のことであろう）

昭和20年8月8日ソ連，対日宣戦布告。9日，満州各地に侵入。戦争が身近にきたという深刻な情勢になった。8月14日，17歳以下に防衛召集下令，15日に全員が入隊することになった。その前に身体検査があり，不適格者には兵役免除の措置がなされた。私は柔道の試合で足を蹴られて蜂窩織炎に罹り通院していたので，不適格者になり14日の夜行で奉天に帰った。」

山下氏は軍隊不適格者となって終戦前に実家のあった奉天へ帰郷した。工大予科生と同じく，8月15日に全員入隊することに一旦決まり，前夜の14日に両親に遺書を書き，遺髪を残して準備したが，15日の玉音放送で入隊中止となった。旅順高校では，学校当局の方針で，終戦と共に生徒は全員実家へ帰されることになった。

この官立最後の高等学校は，「ただ過ぎに過ぐるもの」に書いた芝原和夫氏によると：

「旅高はその生い立ちからかなり皇国思想派（？）を教授陣に送り込んでいたのではなかったか。校長の一

人は某高*で勇名を馳せた硬派の生徒主事であったとか。私たち最後の入学生ですら異様に感じた雰囲気を，……」

（＊某高はおそらく戦前の松山高等学校で，そこで生徒主事，のちに終戦時の旅順高校校長になったのは行元豊円校長のことであろう）

この奉天千代田小学校で同級だった山下信君のほか，筆者の奉天第二中学校同級生で旅順高等学校に行ったのは北原朗君，黒子孟夫君らで，戦後松山高校で一緒になった旅順高校生には吉田極君のほか，木原彊君，高岡義雄君らがいた。残念ながらこのなかで吉田，高岡両君は既に亡い。

お わ り に

あれから半世紀を越した現在，かねてからの念願であった旅順再訪を2003年秋に漸く果たし，筆者の気分は何となく落ち着いた。実は1983年，中国科学院上海植物生理学研究所の招きで第2回目の訪中をしたとき，研究所の湯玉瑋教授（故人）と趙毓橘博士（筆者の研究室に留学した）の計らいで，当時立ち入りを許されていなかった旅順訪問特別許可証を中国科学院から発行してもらった。第1回（1978）のときには北京の中国科学院植物学研究所に招かれ，先方の計らいで，筆者が育った奉天（現瀋陽）を訪問，母校・千代田小学校を公式訪問し，旧自宅を訪ねた。2度目の訪問では妻も招待され，上海から瀋陽を再訪，列車で瀋陽から大連へ着いた。すると，現地の人が旧ヤマトホテルの宿所に現れ，旅順訪問は解放軍の許可が出ないので不可能です，と告げた。再度にわたり，上海と北京に電話し，事情を尋ねたが，湯教授はただ“申し訳ない”と言うのみで，らちがあかず，止む無く大連から北京へ飛んだ。中国側の違約に腹の虫が治まらなかった筆者は，北京における講演を終わるやいなや，予定を早めて飛行機の手配をし，その日のうちに帰国した（妻は折角北京まで行ったのに，同地で何も見ることができなかった，といって嘆いていた）。

瀋陽で荒れ果てた旧宅を見，もう中国を訪問したいという気持は消え失せていたが，旅順には未練が残った。子供の頃から楽しい夏休みを過ごした，そして終戦時に天皇陛下の玉音放送を聞き，ソ連兵に進駐された美しい旅順だけは訪ねたい，という気持ちは失っていなかった。先年たまたま，大阪で奉天第二中学校の同級会が開かれ，旅順の話が出たとき，白石義明君が“旅順に行けるよ”と言った。聞いてみると，白石君は旅順の小学校出身で，その同窓会を旅順で開いたと言う。2003年春，彼の同窓会が再び旅順を訪問する，ということになり，筆者はそれに参加させて頂くことになった。ところが，例のSARS（Severe acute respiratory syndrome）のため，同窓会が延期になった。そのとき，筆者の大学時代，同じ教室の後輩で，埼玉県立ガがんセンター，国立遺伝学研究所教授だった瀬野悍二博士が一緒に参加することになっていた。彼は終戦当時，旅順中学校在学中で，彼の父君は旅順師範女子部の音楽の先生であった。白石君の同窓会が延期になり，残念であったが，そのまま日が過ぎた。

秋が近づき，瀬野博士から電子メールで，旅順行きはどうなった？　と言ってきた。白石君たちの同窓会を世話している東京・日中旅行者の担当者に尋ねたところ，個人旅行も可能だから，旅順を訪問してはどうですか，という返事であった。そこで瀬野博士と相談し，2003年10月11日に出発することになった。折角の機会だったので，湯沢宏君を誘ったところ，たまたま奉天二中の同窓会もあるので，誘いには応じてくれなかった。こうして，旅順を訪ねる念願がようやく実現し，旧扶桑町の「新世紀大飯店」に2泊，旅順を心行くまで見ることができた。外国人向きでないため，お世辞にも立派なホテルとは言えなかったが，朝食の饅頭（マントウ）は美味しかった。また，現地ガイドのRさん，運転手のSさんは親切で，希望するところにはどこでも連れて行ってくれた。最後の一泊は大連のスイス・ホテルという豪華ホテルで，目の前に元の姿の大連駅が見えた。

なぜ，旅順に行きたかったのだろうか，と筆者は自問した。1978年，戦後初めて中国を訪問，奉天を訪ねることになったとき，研究室の一人の大学院生S君がシニカルに，

『先生，故郷は遠きに在りて想うもの，と違いますか？』

と筆者が浮き浮きしているのをからかったことを思い出す。確かにその通りで，我が家の荒廃ぶりを見たとき，懐かしさより悲哀感の方が大きかった。今回の，念願の旅順再訪では，たしかに興亜寮の撤去跡を見たことは悲哀であったが[10]，工科大学本館の変わらぬた

10）興亜寮光風閣のステンドグラスの破片を，19年卒の松尾謙吉氏が入手したと聞く。

たずまい，新市街のアカシア並木，そして白玉山表忠塔，旅順駅など，ほぼ昔通りの姿を見ることができ，一種の安堵感を得たことは嬉しかった。それでも，再度訪ねたい，という気持ちは今のところ涌いてこない。やはり，もはやかっての日本人の旅順ではない，という現実を否応なく実感したからであろうか。いずれにしろ身近な歴史を再び目の当たりにすることができたことは有難かった。

筆者らの学年は，中学は短縮で，5年卒業生と一緒に，昭和20年春4年修了で卒業させられ，さらに旅順の大学予科あるいは高等学校は1年生に入学して間もなく閉鎖廃校となった。また，日本に引揚げ後に転入した高等学校では旧制最後の卒業生（引揚げの年に転入学して最後の1年上になった友人もいる），大学も旧制最後，という具合で，まさに時代の波に翻弄された。しかし，短期間にしろ旅順の学校で学び，それが基礎となって帰国後も“教養主義”の伝統を持つ旧制高等学校に学ぶことが出来た者は幸運であった。旧友たちのかなりの人は帰国後，いろいろな事情で進学を断念せざるを得ない者もいたわけであるが，あの短い旅順の寮生活は70歳半ばに達した今，代えがたい貴重な経験であった。

謝　辞

今回の旅順訪問を可能にする機会を与えてくださった上，旅順に関する資料を提供し，本稿を通読してくださった奉天二中の級友・白石義明君，現地確認のため，当時の旅順高等学校校舎の写真，その他旅順高等学校に関する貴重な資料を提供してくれた，奉天千代田小学校の級友で，終戦時，旅順高等学校在学中だった山下信君，原稿を通読して意見を下さった中学，予科同級の湯沢宏君，同学の畏友・田澤仁博士（東京大学名誉教授），それに今回同行し，原稿を通読して下さった瀬野悍二博士，また，旅順師範学校女子部についてご教示下さった「爾霊会」代表・中溝陽子氏にお礼申しあげる。旅順について貴重なご意見を頂き，原稿を読んで下さった藍野学院短期大学学長・堺俊明博士，旅順工科大学の先輩・蒲原幸生氏および旅順高女出身の原田（旧姓佐々木）信子氏に感謝する。

引用文献

Grillandi, M.（1982）Mata Hari, Rusconi Libri S. p. A., 秋元典子訳「マタハリ」中央公論社，1986
秦　郁彦（2003）旧制高校物語。文春新書，文芸春秋社
服部勘太郎（1937）旅順案内，山縣文英堂
平凡社（1972）世界大百科事典，31巻
飯坂太郎編著（1982）昔日の満州，図書刊行会
北大路健編（1979）写真集・さらば大連・旅順，図書刊行会
金　連纘（1993）ヌルハチの末裔として
真鍋重忠（1985）日露旅順開戦史，吉川弘文館
永尾　善作編（1926）戦蹟と旅順
日露戦争写真画報（1905）旅順降伏記念帖，博文館
日露戦争実記（1904）旅順閉塞隊，博文館
旅高六志会（2003）ただ過ぎに過ぐるもの，最終在校六回生の回顧録
旅順工科大学掉尾会（1990）最後の旅順工科大学予科生の記録・掉尾を飾る
旅順工科大学同窓会（2000）旅順工科大学開学九十周年記念誌・平和の鐘
旅順高等学校向陽会（2000）向陽2000年別刷
旅順高等学校向陽会（1980）官立旅順高等学校創立四十年史
旅順図書館（1936）露治時代の旅順――関東局施政三十周年記念
酒井修一編（1988）日露戦争写真集，新人物往来社
佐藤益躬（1997）旅順物語，「ふるさと旅順」別刷，同窓会霊玉会